

マブイ  
魂の観念  
—琉球弧の民間信仰—

“Mabui” Concept of Souls in Ryukyuan Folk Belief

高橋孝代  
TAKAHASHI, Takayo

キーワード：マブイ、魂、死霊、ユタ

## I はじめに

現代は、心の時代と言われて久しい。近年の日本においては、2011年の東日本大震災等により、人間の力では及ばない自然の力を再確認することとなった。自然や他者との共生の重要性が現実味を増し、自然の中の人間、人間の豊かさとは何か、といった本質的な問題が問われるようになった。「科学万能」と言われる時代であって、精神的な思考が深められた。

この科学技術の発達した現代日本の中で、古くからの信仰が今に生きている地域がある。琉球弧の島々は、「神々の島」と呼ばれるほど、豊かな精神文化が息づいている。シーサーや石敢當などの豊富な魔除けに関するまじない、シャーマニズムや祖霊崇拜といった民間信仰からキリスト教や仏教といった世界宗教まで、様々な信仰が混在している。

そのため琉球弧の信仰は、これまで多くの研究者を惹きつけてきた。よって先行研究にはかなりの蓄積がある。例えば、民俗学の分野で、柳田國男の『海南小記』、『海上の道』などの先駆的な研究成果はその後の沖縄文化研究の基盤となった。そして、折口信夫は1921年と1923年の二度の沖縄調査で、年に一度、祭りに訪れる神々を「まれびと」と呼び、常世からやってくる「まれびと＝来訪神」が現世に幸をもたらすという考え方に古代信仰の原点があると考えた。さらに、文化人類学の分野においても、比嘉政夫による『女性優位と男系論理』に代表される祖先崇拜とその組織「門中」研究、およびおなり神信仰の研究成果などがある。近年は、福寛美による『ユタ神誕生』などユタと呼ばれる奄美・沖縄のシャーマンに関する著作が目をはく。なかでも、松堂玖邇による『神

女誕生』などシャーマン自身による自伝的著作が新しい<sup>1)</sup>。

それらの著作の中で、奄美・沖縄では魂をマブイと呼び、人間の体に魂の存在を信じる文化が息づいていることは、しばしば報告されてきた。酒井卯作の『琉球列島における死霊祭祀の構造』には島々での民族誌的報告が、そして村武精一の『アニミズムの世界』には「奄美のマブリ霊」として4ページにわたり魂に関する記述がある他、奄美・沖縄を含む日本列島、さらには東南アジアの死霊アニミズムに関する考察がまとめられている。このように、魂に言及している著作は少なくないが、現状の報告や附属的な言及に留まり、分析や比較考察には研究の余地があると考ええる。よって、筆者は、その第一歩として本稿では、人間の魂（マブイ）を中心に魂観念の全体像を捉え直し、人々の生活の中でマブイがどのように生きているのか、実態に近づいてみたい。そして、沖永良部島を中心とした奄美・沖縄における魂の観念を、世界の他の地域と比較考察する。

マブイの観念が息づいている文化の範囲は、いわゆる「沖縄文化圏」と言われる地域である。行政的には沖縄県全域と鹿児島県大島郡である。地理的には、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島の諸島群で、本稿では「奄美・沖縄」と呼称する。

調査の中心となる沖永良部島は、琉球弧のほぼ中央に位置する。鹿児島市からおよそ540キロ、沖縄本島の辺戸岬には約60キロの距離にあり、面積が100キロ平方メートルの小さな島である。人口約15,000人の島には、和泊町と知名町があり、42の集落が点在する。亜熱帯に属するこの島は、花卉栽培や根菜野菜などを主産業とする農業の島である。古くは琉球王国の領土であったが、1609年の薩摩藩の琉球侵攻後、直轄領地となり、現在は鹿児島県に属する。しかし、言語や信仰をはじめ、文化的には沖縄本島に近く、自他ともに「沖縄文化に属する」と

認識されている。

現在、沖永良部島には人口に比して、多くの宗教機関が存在するが、昔ながらの民間信仰は今も変わらず人々の悩みや不安を解消している。この時代の島民にはどのような悩みや不安があって、信仰はどのように機能しているのか。平和で穏やかにみえる島の人々の裏側に潜む精神世界を、マブイを中心に明らかにしていく。

ここで、本稿で使用する鍵概念となる用語について定義しておく。魂・靈魂のことをラテン語で「アニマ」(anima)ということから、イギリスの文化人類学者E.B.タイラーは魂・靈魂の存在を信じる信仰を、「アニミズム<sup>2)</sup>」と名付けた。タイラーは、原初的アニミズムは、二種類の靈的存在の観念で成り立っていると考えた。一つは樹木や岩石など自然界の森羅万象に宿るとされる「精霊」(spirits)であり、もう一つは、人間に宿るとされる魂・靈魂(souls)である。本稿で扱うのは、後者の人間に宿るとされる魂である。

奄美・沖縄の島々では、島ごとに、さらには集落ごとに話す言葉が少しずつ違っているので、魂の呼び名も少しずつ違っており、「マブイ」、「マブリ」、「マブヤー」などと呼ばれている。沖永良部島では「マブイ」、「マブイ」、また「タマシ」などと表現される。本稿では奄美・沖縄における「魂」を指す言葉を「マブイ」と呼称し統一する。

## Ⅱ 生者のマブイのあり方

### 1 生きマブイ

マブイには、生きている人間に宿るマブイと死んだ人間のマブイがある。まず、生者の人間のマブイのあり方をどのように捉えているのか、改めて考えてみる。

沖永良部島では、大正のころまで、魂を呼び戻すため屋根の上にのぼり「ムドゥトー」と叫ぶ魂呼びの風習があった。「ムドゥトー」とは沖永良部の言葉で「戻って来い」という意味である。難産や、熱病や気絶、あるいは若者が重病で生死の境にある時に、男性二人が家屋の屋根に上り「ムドゥトー」と叫びながら扇でマブイを招く。病人が男性の場合は北、女性の場合は南の方角を向いて叫んだという。もちろんマブイが人間の体から離れると、人は死ぬと考えられているからに相違ない。しかし、現在では、この魂呼びの風習は沖永良部島ではすっかり見られなくなった。

次に、最近採取した話からマブイを捉えてみる。以下は、筆者が沖永良部島で調査中(2014年8月6日)にSさんから聞いた話である。

Sさんは60代の女性である。話は、23年前に遡る、1991年9月のことである。彼女の夫が、八月十五夜の中

秋の名月を友人たちと海の近くで楽しんでいた時、用をたそうとして席をたった。その祭、酔っていたこともあり、崖から足を滑らせ転落し、命を落としてしまったのである。その知らせを聞いたとたん彼女は意識を失った。

周囲の人は、彼女からマブイが離れてしまったのだと思い、マブイをもとの肉体に戻すために慌ててユタを呼んだ。ユタはSさんの魂を呼び戻す儀式を施した。彼女の意識は、水が入っている茶碗の中に、丸い玉が見えた時点から戻ったという。一日半が経過していた。茶碗の中の丸い玉が、マブイとされ、肉体に戻ってきたというのである。今でも、その間の記憶はないままだという。

その後、不慮の事故でなくなった夫のマブイもあの世に無事に行けるよう、そして現世に未練を残し、生きているもののマブイを連れて行かないよう、ユタに鎮魂の儀式をお願いしたという。ユタの指示に従い、事故現場からマブイをお供して、町内の神社を三か所まわり神様に祈り、最後はマブイをお墓に伴っていったという。

Sさんの話によると、夫のマブイは、四十九日にまだ高校生だった娘に、夢を見せたという。夢の中で、「お父さんのマブイは、ちゃんとグショー(あの世)に行くから、安心して暮らして」と言ったら、娘がSさんに伝えた。Sさんはそれを聞いて、さっと不安が消え安心したという。それまでは、不安と恐怖のため一人で風呂にも入れなかったと話してくれた。

奄美・沖縄では、マブイは、生きている人間からも離れてしまうことがある、と考えられている。沖永良部島では、非常に驚いたことを「タマシ トパチャン」と表現することがあるように、あまり驚くと魂が肉体から離れる、と考える。生きている人間の魂は、時として肉体を離れてしまうことがあるが、魂を呼び戻す儀式によって再び肉体に戻ることができ、それを執り行う靈的能力があるのはユタであると信じられているのである。

### 2 マブイと子供

次に、子供とマブイの関係に焦点をあてる。

子供は大人より肉体と魂の繋がりが弱く、マブイが脱け出しやすいと考えられ、特に注意を払われている。子供が失神したり、大怪我をしたり、溺れたりしたときは、命に別条がなくともマブイが離脱しその場所に残される傾向があると考えられている。甲東哲の『シマの言葉』には以下が記されている。事故にあった子供を室内に寝かせ、縁側を少し開け、そこにご飯その他のご馳走を用意する。ユタに祈祷してもらい、親は事故現場に行き、「靈魂よ、靈魂よ、遊びに夢中になり、友達と夢中になっているようだが、家でお母さんがご飯も炊いて待っているから、さあ、来ておあがりなさいよ」と文言を唱える。そして子供が事故当時来ていた着物を現場におき、桑の

枝で、三回お払いをし、その枝を着物に包んで帰る。その後、家で待っていた人は、「そんなに遅くまで遊びに夢中になっていたのか、早く来て、魚もご飯もおあがりなさい」とあいさつをしてこれを迎え、魂を肉体に戻す「マブイグミ」の儀式を終えると、記されている。

また、マブイが肉体から離れないように、明治のころまでは以下のような予防的措置のマブイグミもあったという。甲によれば、出産の数日後、ユタが母親の背や抱かされている赤ん坊の頭をなでながら、「イシクジマ、ハニクジマ ナユンタベ ソクサイ アラチ タボリ（石ひざら貝、金ひざら貝のように腰のまがるまでも息災にあらせてください）」などと唱えてから、「ホーホー」と息を吹きかけた。これもマブイグミと呼ばれたという。

また、背縫いの破れた着物を着ると、そこからマブイが抜け出るとされていたので、親はそのようなことがないように注意をしたという。また、幼児の髪を刈る時は、「ユムドゥイヌズー（雀の尾）」と称して前頭部、後頭部に髪を少し刈り残したという。これは、マブイが抜けないようにするためと、気絶した時に引張って気を取り戻させるためだという<sup>3)</sup>[甲 1987：195-196]。

### 3 マブイとクスケー

前述のように、一般に子供は、魂が肉体から抜け出しやすいと考えられている。魂が肉体に宿っている年数が短いので、固着が弱いと考えられるのであろう。生まれたばかりの赤ん坊は特にその傾向にあると考えられているようである。沖縄本島および周辺離島では、赤ん坊がくしゃみをしただけで魂、すなわちマブイが外に出て行ってしまうと考えられている。そのため、マブイが体の外に出ないように、くしゃみをした後「クスケー」と唱える慣習がある。島袋源七の『山原の土俗』（1929）によると、くしゃみをすると「後生（グショー）の人に連れて行かれる」、すなわち幽霊にあの世に連れていかれ死ぬ、という考えがあり、「クスケー」と唱えることによって死を免れると信じられていたという。

「クスケー」の由来は、沖縄の昔話として地域に語り継がれている。その大意を紹介する。以下は『21世紀に残したい沖縄の民話』所収の「クスケーの由来」を筆者が要約したものである。

昔、ある夫婦がやっと子供を授かった。夫婦は喜んで、子供が生まれて七日目に親戚や隣近所を招待して誕生祝をすることにした。三線の上手な人を探している時に、偶然出会った美しい女性が、三線が上手だということで、祝いの席での演奏をお願いした。三線にあわせて祝いの宴が酣の時、隣の家のおばあさんが、こっそり主人を呼んだ。三線の女性は普通

の人ではない、この節穴から覗いてごらんというので主人が覗いてみると、それは先程の女性ではなく骸骨の姿をした幽霊が三線を弾き、歌を歌っているのであった。驚いた家の主人は、夜遅く宴が終わった後、幽霊の後をついていくと、墓地で消えてしまった。しばらくすると、墓地から話声が聞こえてきた。もう一人の幽霊は、骸骨に、誕生祝いの赤ちゃんにくしゃみをさせてマブイをとってくるように言いつけられていた。だが、だれかがクスケーといったらマブイはとれないから用心するようにと会話していた。それを聞いた主人は、急いで家に戻り、家じゅうの人にもうすぐ幽霊が赤ちゃんのマブイをとりにくるので、くしゃみをしたらクスケーというようにと注意を促した。その時、幽霊が赤ちゃんのマブイをとろうとくしゃみをさせた。それを見て家じゅうの人が「クスケー、クスケー」と言ったので、幽霊は赤ちゃんのマブイをとれずに帰って行った。それ以来、赤ちゃんがくしゃみをするとクスケーというようになった。

このように、昔話では赤ん坊のマブイがとられそうになり、クスケーと呪文を唱えて防ぐ、というストーリーであるが、一般には、くしゃみの後のまじないは、赤ん坊に限らず、小児の場合は傍にいる人が、大人の場合は本人が唱えるのが慣習である。

このまじない文言、「クスケー」に関しては、山里純一の『沖縄の魔除けとまじない』に詳しい。山里によれば、クスケーは、江戸時代、日本本土の庶民のたちの間でくしゃみの際唱えられていた呪文「糞を食らへ」が語源であるという。そして、それは更に平安時代末期まで遡ることができ、当時の貴族社会ではくしゃみのまじないとして「休息万命 急急如律令<sup>4)</sup>」と唱えられていたと記す[山里 1997：261]。

平安時代の文学作品、清少納言の『枕草子』には、「にくきもの…はなひて誦文する。おほかた、人の家のをとこ主ならでは、たかくはなひたる、いとにくし<sup>5)</sup>」とある。補注には「…くさめは不吉のものとされ、本人は勿論他人にも悪い予感を与えた。ただそのあとで呪文を唱えると災厄を免れると信ぜられ、その呪文は『千秋万歳 急急如律令』（袖中抄）、『休息万命 急急如律令』（拾芥抄）などのめでたい文句である。不吉なはずのくさめをしながら（あるいはわざと大きなくさめをして）、いかにも得意そうに呪文を唱える、その態度をここで『いとにくし』と評しているのである<sup>6)</sup>」と解説している。

また鎌倉時代末期に成立した吉田兼好の随筆集『徒然草』第47段にも、ある人が清水寺への参詣の際、道連れとなった尼が「くさめくさめ」と言い続けているので、



理由を聞いたところ、「ああ、忌々しい。くしゃみをした時、このようにお呪いの言葉を言わないと死んでしまうと申しますから、私が乳母となってお育てした若君が、比叡山に稚児となっておいでなので、たった今も、もしや、くしゃみをなさったかと心配で、このように申しているのですよ<sup>7)</sup>」と言った、とある。

くしゃみの災厄を避けるための呪文「クスケー」は、その言葉に魔を取り除く力がある、と信じる言霊信仰をもとにするまじないであるが、世界の他の民族文化にも、くしゃみで体から魂が外へ飛び出さないよう、傍にいた人が大急ぎで何か言う習慣は多々みられる。

英語にも、くしゃみをした後のまじないの言葉が今も生きている。筆者もアメリカ留学中にしばしば経験したが、くしゃみをするたびにどこからともなく「Bless you」と誰かが言ってくれるのである。

ジェニングズによると、「くしゃみ」に対し、マレー人はより直接的に「魂よ、戻って来い!」、古代ローマ人は「ジュピターがあなたを守るよう!」、サモア人は「あなたに生命を!」、ドイツ人は、「よい健康を!」、ユダヤ人は「よい生活を!」、ヒンズー教徒は、「生きよ!」回教徒は「アラーを褒め称えよ!」を唱えるという〔ジェニングズ1979:258〕。そして、中国では「千歳」「百歳」あるいは「大吉」を唱えるという〔山里1997:263〕。

くしゃみ後の呪文以外にも、魂が口や鼻から体外に飛び出すのを防ぐまじないがある。例えば、インドのヒンドゥー教徒は、だれかが欠伸をすると、必ず指をパチリと鳴らすという。そうすれば、開いた口から魂が抜け出ることを防ぐことができると信じているからである。また、マルケサス諸島の人々は、死の淵にいる人が死に至らないよう口と鼻を塞ぎ、魂が抜け出ることを防ぐという〔フレイザー 2003:180〕。

「クスケー」というまじないは、主に沖縄本島とその周辺離島に実践される文化と考えられる。沖縄本島全域および本島周辺離島である伊平屋島、伊是名島、伊江島、粟国島、渡名喜島、慶良間諸島からは聴取されるが、宮古諸島はわずかに伊良部島、多良間島で一話ずつ採取されたのみで、奄美諸島や八重山諸島ではほとんど採取されないという<sup>8)</sup>。沖永良部島でも聞いたことがなく、かつてこのような文化があったという記録も、今のところは見つかっていない。沖縄本島周辺のみには優勢な文化は、琉球音階などもそうであるが、比較的新しく伝わってきた文化なのであろうか。いづれにしても、今の本土では廃れてしまった風習が、江戸時代に沖縄島に伝わり今に息づいているということは、非常に興味深い。

### Ⅲ 死者のマブイのあり方

#### 1 洗骨と霊魂

これまで、生きている人間のマブイについて述べてきたが、死んだ人間のマブイはどうなるのであろうか。以下では、死んだ人間のマブイについて、「あの世」に行かず、現世で災いをもたらすとされるネガティブな霊魂を「死霊」、グシヨ（後生・あの世）に行き、現世の人々の守り神になると考えられるポジティブな霊魂を「祖霊」と記す。

人間の肉体が減った後、死者のマブイはこの世の人々との縁がなくなるわけではない。死後も、死者の霊魂は、その子孫によって丁重に供養され、生者と死者のマブイの関係は続く。特に、死から数年は重要である。通常の葬式の後にも二度目の葬送儀礼が行われる。それは、「洗骨」と呼ばれる第二次葬で、一度死者を葬った後、数年後(1~7年後)に骨を洗い清めるのである。肉体が減った後、霊魂は、一旦埋葬しただけでは死霊のままで、子孫や近親者に災いをもたらしかねない。そのため、洗骨をすることによって、魂を浄化し、ようやく子孫を守護し豊穡をもたらす祖霊になるという考えに基づく風習である。洗骨は、死者の霊魂が鎮められ安定する、と考えられるためである。洗骨の後、お盆や、墓正月といった年中行事と、一年忌から三十三忌までの年忌祭を通して、祖霊が「神様」となって昇天するための鎮魂の儀礼が続く。洗骨は、奄美・沖縄の島々に共通して行われる風習であるが、土葬から火葬に変わった現在では、簡素化、消滅の方向に進んでいると言えよう。

#### 2 死霊のマブイ

マブイは、宿っていた人間の肉体が減びると、そこから離れ単独になり霊魂になるが、死に方によっては、死霊、悪霊となる可能性もあると考えられている。不慮の事故で死んだ場合は、現世への未練からその場に留まり、また他人によって死に至らしめられた場合は、自分を殺した者を祟る、など生きている人間へ災いをもたらす場合もあると信じられている。

ここで、死者の魂が、現世の人間に厄災をもたらす死霊となったとされる話を紹介する。以下は、Aさん(48歳)から2014年8月12日に採取した話である。

今から25年前(1989年)の話である。親戚の子供たちが、突発の熱や腹痛といった原因不明の体調不良があいついだ。それを心配した子供の母親がユタに相談した。すると、原因は祖先の中で、水難事故で亡くなった人物に原因があるとわかった。それは、以下のストーリーである。

「明治時代に曾おじいさんが、沖縄に出稼ぎに出ていた

が病気になるし働けなくなった息子を、沖縄に迎えに行き、エラブに帰る船に乗っていた。すると、天気が悪くなって、船が転覆しそうなりしけた。すると他の乗船していた人が、こんな全員が生きたか死ぬかの時に、重病人を船に乗せていたら、死神がきてよくないから、海に病人を遺棄するよう迫られて、なくなり息子を海に放り出してしまった。(死を誘うもの、不吉なもの、生贄的な存在とされた。)その後、幸い、船は転覆せず乗船者たちは生き残った。ユタによると、犠牲となった男性の靈魂が、一族の体調不良の原因だという。その靈魂は、家に戻りたくて何度も家に入ろうとするが、玄関で海の神に連れ戻されるのだという。その無念が一族に祟り、さまざまな体調不良を起こさせているのだという。

そして、本家であるAさんの母は、ユタと親戚の女性と三人で、この不遇の死を遂げた先祖の魂を鎮め慰めるために、ユタの言われたように一連の儀式を行った。

まず、ユタが持参した三個の小石に魂を取めるため、沖縄からの船が到着したであろう和泊の港に行った。そして海の神様に許しを請い、その魂を呼び戻し、石に籠めた。その次に、町内の数か所の神社、金毘羅神社、国頭の御崎神社にお参りした。最後に、魂を込めた三個の石を、小さな骨壺に入れ、新たに作った個人の立派なお墓に入れた。この先祖の墓を建立するためおよそ100万円の費用をかけたという。マブイの怨念を鎮めるために、現世の人間に、このような経済的出費をとまなう行動を起こさせるのは、靈魂が現世の人間に何らかの影響を及ぼすと信じられているからに他ならない。そして、このマブイの存在を信じる心が祖先崇拝を支えているのである。

不慮の事故を遂げたマブイを死霊として恐れる同様の考えは、1950年代前半の沖永良部島にもあった。

島内の小学校で児童が鉄棒から落下し骨折し、それがもとで死亡した。同校の生徒達は、死亡した生徒が落下した鉄棒付近に靈魂が留まっていて怖いといい、その鉄棒に近寄らない。それで、ユタを頼んでマブイを墓に送る儀式をすることになったという。立ち会った人の話によると、ユタが呪文を唱え、ユタの持っていた茶碗の水面に針でついたくらいの点が現れ、それが激しく回り始めた。ユタはそれが死亡した生徒のマブイだとして、墓へお供していったという。

日本本土でも、怨霊を恐れ、鎮魂の儀式を執り行う発想はあり、神格化された「菅原道真」の例はよく知られている。道真は朝廷での活躍や権力への妬みから陥れられ、大宰府に左遷され、失意のまま亡くなったとされる。彼の怨霊が、朝廷や都に災いをもたらしたと考えられたため、彼の魂は慰められ祀られたのであったが、今日では学問の神様として神格化され全国に知られる存在とな

った。この例も、怨霊となった魂を鎮めることが発端であったといえよう。

祖先の魂が子孫に何かを伝える例は、日本以外にもある。フレイザーによれば、キー諸島民は、祖先の魂は食べ物を与えられないと、怒って人々の魂を拘留し病気にさせると信じる。そのため、島民は墓に食べ物を供え、祖先たちに病人の魂を戻してほしいと頼む。また、その魂が途中で彷徨っているのであれば、すぐに家に送り届けてほしいと頼むという〔フレイザー 2003:187〕。

不慮の事故、海難事故など、通常とは異なる死を遂げた人のマブイは、現世に未練を残し、死霊となって生きている人に災いをもたらす、と考えられていることがわかる。死んだ場所にマブイは留まる傾向にあり、現世の人に災いをもたらすと考えられている。そのため、「迷わずあの世に行く」ことができるように儀式を行うのである。

## IV マブイの形態と性質

日本本土でも古来より、魂は動物の肉体に宿って心の働きを司ると言われ、「魂<sup>たま</sup>し<sup>び</sup>霊」の意味である。「たま」というのは美しいとほめるいい方で、「し」は氣息を表し、「び」は奇(くしび)の意味で、珍しいということを指す。つまり、「たましい」は古代の日本人にとっては、玉のように珍しいが、玉のように固まった固体ではなく、気や息のように目にははっきりとは見えない気体のような存在として認識されていたようである。

目に見えない氣息のような魂の存在は、どのような姿形で表現されるのか。奄美・沖縄では、しばしば三角形と認識されているようである。酒井卯作の報告によると、産衣に縫い付ける三角の布や袋は、沖永良部島では「マブヤ布」、与論島で「マブイ袋」と呼ばれていたという。そしてその産衣と与路島、加計呂麻島では「ハビラ(蝶)袋」と呼ぶように、三角の延長として生物では「蝶」に例えられることがしばしばあった〔酒井1987:184〕。

沖縄の最古の歌謡集である『おもろさうし』<sup>9)</sup>にも、下ののように蝶に例えられた魂が、歌に読み込まれている。

- 一 <sup>あ</sup>吾がおなり御神の  
<sup>まぶ</sup>守られて、おわちやむ  
やれ <sup>あ</sup>ゑけ  
又 <sup>おと</sup>妹おなり御神の  
又 <sup>あやはべる</sup>綾蝶 成りよわちへ  
又 <sup>くはべる</sup>奇せ蝶 成りよわちへ

〔訳:我々のおなり御神が、守ろうとって来られたのだ。やれ、ゑけ。おなり御神は、美しい蝶、あやしい蝶

に成り給いて、守ろうと云って来られたのだ」[『おもろさうし』 卷十三 965 外間守善校注]

この詩は、航海の安全を姉妹のマブイが蝶と化して守りに来るという意味である。奄美・沖縄では、女性はその男兄弟を守護する存在として「おなり神」と呼ばれ、霊的優位性を示してきた。蝶の他にも、蜻蛉、鳥など羽のある生物がマブイの化身の象徴とされているが、マブイが空中を浮遊することができるという性質が表現されているのである。

柳田國男も魂を鶯に譬えていた。それは、1897年に『文学界』に発表された「籠の鶯」と題する詩的散文で「昔恋のかなはざりし男、死して鶯となりて、少女が窓辺に行きて鳴きぬ。少女出でて之を見るに、逃げむともせざりければ、捕へられて籠の中に養はれぬ。…」[柳田 1991: 118]と死んだ男の魂が鶯になり恋する少女に飼ってもらおうという内容である<sup>10)</sup>。その後、柳田が岩手県遠野の人々の話をまとめ1910年に出版した『遠野物語』の第51話、「オット鳥」にも、娘が鳥になった話が収められている。長者の娘が恋人と森に行ったが、恋人がいなくなり探し続けるあいだにオット鳥(コノハズク)になった話である。オットーンと鳴くのは夫を探して鳴いているのだという。

他の地域でも魂を蝶や鳥として表しているケースは報告されている。

フレイザーによれば、ビルマ人は母親が幼い子供を残して死んだ場合、「蝶」となった子供の魂が母親の魂を追いかけるので、その魂を連れ戻さないと子供は死ぬと信じられている。そのため、宗教的職能者を呼び、連れ戻してもらう。遺体の隣に鏡を置き、鏡の上に羽のように軽い綿毛を一片置く。そして鏡の傍らで一枚の布を両手で広げてもち、母親に向かって「蝶」すなわち子供の魂を連れて行かないよう、送り返すよう懇願する。綿毛が鏡の表面から滑り落ちると、彼女はそれを布で捕え優しく子供の胸に置く、といった儀式を行うという。そして同様の儀式は、夫婦の一人あるいは、仲良しの二人の子供のうち一人が亡くなった場合も行われるのだという[フレイザー 2003: 186-187]。また、マレー人は、魂が羽の生えた鳥であることを前提としたまじないを行う。彼らは、鳥は米を食べる性質から、米で注意をひくことができ、肉体から飛翔するのを妨げられると信じている。ジャワ島では、赤ちゃんを初めて地面におろすときには、鶏籠の中に入れ、母親は牝鶏を呼ぶようにコッコと鳴きまねをするという。スマトラのバタ民族は、男性が危険な仕事から戻ると、魂を留めておくために米粒を頭の上に置くという[フレイザー 2003: 181-182]。魂を鳥と考え、米でつって、魂を逃さないようにしているのである。

このような、魂が羽をもつ生物のごとく空中を浮遊する性質を持つという捉え方は、ある程度の一般性をもつと考えられる。

## V おわりに

これまで、マブイについて調査結果を含めて述べてきた。奄美・沖縄における観念としてのマブイが生活の中で顕になるのは、生きている人間のマブイが肉体を離脱したと考えられる時と、死んだ人間のマブイがあの世界に行かず、現世を彷徨っている状態とされる時である。生きている人間に宿る魂を「生きマブイ」、死者のマブイを「死にマブイ」と大別できる。生きている人間のマブイがその肉体から離れた場合、元に戻すことが必要であり、死者の魂は「後生(グショー)」すなわちあの世に行くことが、マブイの「あるべき状態」、「正しいあり方」と認識されている。それぞれのマブイのあるべき状態は異なっている。

生者のマブイが離脱すると、その人間は体調不良となり、その状態が続くと死に至るとされる。よって、マブイが離脱すると、肉体に戻さなければならないと考えられている。マブイを肉体に戻す儀式は、魂を籠めるという意味で「マブイグミ」と呼ばれ、それを行えるのはユタ、すなわちシャーマンである。

奄美・沖縄では、死んだ人間のマブイは子孫によって丁寧に供養を施さなければならない。なぜなら死者への供養が不十分であると、マブイはこの世に未練を残し彷徨い続け、子孫を守護する祖霊神に昇華できないと考えられているからである。成仏できないマブイは子孫へ体調不良や災いをもたらすとされ、相談されたユタは、その原因を「供養不足」と判断し、子孫にさらなる供養を促す。ユタは、魂を「あるべき状態」へ導く案内人となっている。

世界の他地域にもみられる魂の性質は一般的に類似性が高いが、奄美・沖縄の特徴といえる点もある。それは、死後の魂を、死者儀礼を通して丁寧に供養する限り、現世で生きる子孫を守護してくれると信じる祖先崇拝という信仰の形を、ユタという宗教的職能者が支えているという、人、ユタ、祖霊の相互関係が成り立っている点である。

現在、奄美・沖縄の人々にとって、魂の存在は生活の中で常に意識され顕在化しているわけではないが、生活になんらかの異変、異常が起きた時に、その原因として魂の存在が強く意識される。生活における「異常」を「正常」に戻すため、ユタは魂をあるべき状態へと導く儀礼を執り行う。現代科学でも解明されていない「魂」の存在や「扱い方」は、伝統的手法に頼らざるを得ず、古く



から引き継がれた方法によって扱われているのである。

#### 注

- 1) 松堂には、他にも『降臨』2003、『人は死ぬとどこへ行くのか』2004の著作もある。
- 2) アニミズムという語と概念を提唱したE.B.タイラーは『原始文化』でアニミズムを原初的信仰であるとして宗教の起源とみなした。
- 3) 現在は島内でこの髪形は、みられないようになったが、筆者は、この髪形を、16年前にタイの東北部でみたことがある。
- 4) 「休息万命」は「長寿」、「急急如律令」は「悪霊よ、さっさと退散しろ」というような意味であるという〔山里1997:186、256〕。
- 5) 清少納言1958『枕草子紫式部日記』池田亀鑑、岸上慎二、秋山虔校注：岩波書店、pp71
- 6) 清少納言1958『枕草子紫式部日記』池田亀鑑、岸上慎二、秋山虔校注：岩波書店、pp336
- 7) 兼好2010『徒然草』島内裕子校訂訳：筑摩書房、pp103
- 8) 遠藤庄司2000「クスクーの由来」『21世紀に残したい沖縄の民話』琉球新報社、pp31
- 9) 首里王府が奄美・沖縄の島々に伝わる古謡ウムイを16世紀から17世紀にかけて編集した。『古事記』、『万葉集』、祝詞をあわせたものにあたる。
- 10) 『柳田國男全集32』の解説を担当した岡谷公二は、柳田自身の意向により彼の初期作品、特に恋愛に関する新体詩などは『定本柳田國男集』には収録されず、柳田の死より16年後筑摩書房から出た『新編柳田國男集』にやっと二詩集が入り、1991年出版『柳田國男全集32』でようやく新体詩人松岡國男の全貌を知ることができるようになった、と記す〔柳田1991:483〕。柳田は晩年に否定していたが、この時期柳田が発表した文学作品の背景には、彼の実際の恋愛体験があることは、田山花袋宛ての書簡などから、当時は文学界の友人たちの間では自明のことであった〔柳田1991:484-487〕ことを岡谷は確信し、『柳田國男の恋』の出版に至った〔岡谷2012:8-11〕。これらのことから、柳田の恋愛時期にあったと考えられる1895-1899年の間に発表された「籠の鶯」も彼の恋愛体験より表現されたものであると考えられる。

#### 参考文献

- 遠藤庄司 2000『21世紀に残したい沖縄の民話』琉球新報社  
岡谷公二 2012『柳田國男の恋』平凡社  
折口信夫 2002『古代研究1—祭りの発生—』中央公論社  
甲東哲 1987『シマの言葉』三笠出版社  
兼好 2010『徒然草』島内裕子校訂訳：筑摩書房  
酒井卯作 1987『琉球列島死霊祭祀の構造』第一書房  
松堂玖邇 2002『神女誕生』フォレスト出版  
——— 2003『降臨』フォレスト出版

- 2004『人は死ぬとどこへ行くのか』フォレスト出版  
ジェニングズ、ゲリー 1979『エピソード魔法の歴史』市場泰男訳：社会思想社  
清少納言 1958『枕草子 紫式部日記』池田亀鑑 岸上慎二 秋山虔校注：岩波書店  
タイラー、E. B 1962『原始文化』比屋根安定訳：誠信書房 (1871/1956 *Primitive Culture*, New York Harper Torch books)  
高橋孝代 2006『境界性の人類学—重層する沖永良部島民のアイデンティティー』弘文堂  
内藤景代 1991『ヨガと冥想 実業之日本社  
比嘉政夫 1987『女性優位と男系原理』凱風社  
福寛美 2013『ユタ神誕生』南方新社  
フレイザー、J. G 2003『金枝篇 (上)』筑摩書房  
外間守善 校注 2000『おもしろさうし (上)』岩波書店  
——— 2000『おもしろさうし (下)』岩波書店  
北静盧 江戸時代末期『梅園日記』(『日本随筆大成』第三期 第12巻所収)  
村武精一 1997『アニミズムの世界』吉川弘文館  
柳田國男 1910『遠野物語』岩波書店  
——— 1956『海南小記』角川書店  
——— 1978『海上の道』岩波書店  
——— 1991『柳田國男全集32』筑摩書房  
山里純一 1997『沖縄の魔除けとまじない』第一書房